

価値関係とレリヴァンス——ウェーバーとシュッツの価値自由論

高 艸 賢

1 報告の背景¹

社会学は、いかなる価値とも無関係な「没価値的」営為でもなければ、いかなる価値にもコミットしない「価値中立的」営為でもない。このことは、マックス・ウェーバー以来の社会学者たちが繰り返し確認してきたことにより、いまや社会学におけるひとつの共通見解となっている。しかし、社会学が「価値」とどのように結びついているかについては、依然として見通しのよい整理が与えられているとは言いがたい。第 1 に、社会学が「価値」と結びついていると述べる時、その「価値」とは正確にはどのような種類の「価値」なのか。第 2 に、社会学が「価値」と結びついているならば、「価値から自由な (wertfrei)」領域はいかにして可能なのか。第 3 に、社会学の立脚する「価値」が多元的であるならば、それは必然的にウェーバーのいう「もろもろの価値秩序の神々の争い」(Weber 1922=1980: 54) をもたらしてしまうのか。これらの問題に明確な答えが与えられない限り、社会学の営為の一部を誤って「科学的ではない」営為と捉えてしまう恐れがある²。

本報告が目指すのは、社会学の「価値」との関係についてより見通しのよい整理を与えることである。これまでこの問題については、ウェーバー研究者が彼の「価値自由」概念の解釈を通じて取り組んできた。本報告はその成果を踏まえつつ、ウェーバー社会学の継承者として知られるアルフレート・シュッツの議論を検討する。本報告はウェーバーとシュッツの議論を参照することで、上記の第 1 から第 3 までの問いに対して一定の答えを提出することを試みる。

本報告がシュッツの見解を明らかにする上で主に用いるのは、2004 年にドイツ語版が、2011 年に英訳版が刊行された『シュッツ＝フェーゲリン往復書簡』(Schütz und Voegelin 2004=2011) である。社会学と「価値」との結びつきに関しては、後述するようにウェーバーでは「価値関係」という用語の下で明示的に論じられている。しかし、価値関係につ

¹ 本報告は、2023 年に晃洋書房から刊行予定である報告者の著書の一部に基づいている。シュッツに関するより詳細な議論についてはそちらを参照されたい。

² ジョナサン・H. ターナーは、「社会的正義を追求する価値負荷的プロジェクト」としての社会学と「価値中立的な科学」としての社会学を対比的に論じ、ここ 50 年のアメリカ社会学が前者に傾倒して行っていることを批判的に論じている (Turner 2019)。ターナーの対比は短絡的であると言わざるをえないが、そのような議論が出てくること自体、ウェーバー没後の 100 年間で積み重ねられてきた社会科学認識論・社会科学基礎論の蓄積が十分に浸透していないことを表しているのかもしれない。ともあれ、右派と左派の間の溝が深まりつつある現代において、〈特定の政治的価値に立脚すること〉と〈学問をすること〉との関係を解きほぐすことは、単なる方法論の問題を超えた意義を有している。

いてのシュッツの考えは、意外なことに彼の著作の中ではあまりはっきりと示されていない³。そこで、これまであまり参照されてこなかった『シュッツ＝フェーゲリン往復書簡』の記述を手がかりに、「価値関係」の問題をシュッツがどのように掘り下げているかを検討する。報告者が調べた範囲では、本報告が参照している 1951 年 4 月の書簡に依拠した論文は見当たらない。この書簡を用いることで、シュッツとウェーバーの議論をこれまで以上に明確化することができると思われる。

2 社会学的探究が結びついている「価値」とはどのような「価値」か？

ウェーバーは「社会科学と社会政策にかかわる認識の『客観性』」において、ハインリヒ・リッカートの「価値関係」の議論に基づきつつ、研究者の価値観が社会科学的探究の前提をなすことを論じている。ウェーバーによると、「そのつど考察される個性的実在のほんのわずかな部分が、そうした価値理念に規定されたわれわれの関心によって色彩づけられ、そのみか、われわれにとって意義をもつ」(Weber 1904=1998: 83)。そして、価値理念によって「色彩づけ」られたわずかな部分が、「知るに値するもの」(Weber 1904=1998: 83)とみなされる。このように「知るに値するもの」を特定することが、「なにものかが研究の対象となるための前提をなすのである」(Weber 1904=1998: 83)。

シュッツは「主題的レリヴァンス」という概念を用いてウェーバーの議論の明確化を試みている。科学的探究の主題的レリヴァンスとは、次のようなものである。

研究されるべきもの、問われるべきもの——ひとこと言えば問題の対象——は、それ自体は問われないものとして受け入れられた秩序立った背景の下でのみ「問題のある」ものになりえます。(ところで、同じことは実践的にレリヴァントなものにもあてはまります。) これがレリヴァンスの第一の概念です。私はこれを「主題的レリヴァンス」と呼ぼうと思います。何がさらなる研究の主題として私の前に現れるのか？あるいは、何が研究主題として私の関心を引くのか？(Schütz und Voegelin 2004: 384=2011: 136)

要するに、社会(科)学的探究の主題的レリヴァンスとは、問いを規定する原理である。社会(科)学の主題的レリヴァンスは、科学理論内在的に生じるというよりも、日常生活者としての社会学者が社会的世界の中で獲得した知識や経験から生じる(例:「社会的不平等はいかにして生じているか」という問いは、私たちの社会に不平等が実際に存在しているという常識的知識・経験や、それを望ましくないと考える態度から生じる)。社会学と

³ 先行研究としては、メインタイトルに本報告と同じ「価値関係とレリヴァンス」を掲げる Srubar ([1994] 2007) がある。スルバルは、主に 1920 年代の草稿に基づいてシュッツのレリヴァンス論とウェーバーの価値関係論とのつながりを明らかにしている。しかしスルバルの論文では、本報告が依拠する書簡は扱われておらず、したがって「価値自由」や「神々の争い」といった論点にシュッツの立場から接近する試みはなされていない。

不可分に結びつく「価値」とは、「主題的レリヴァンス」のことである。それは科学哲学でいう「非認識的価値 (non-epistemic values)」(Risjord 2014: 18) のことでもある⁴。

3 社会学において「価値から自由な」領域はいかにして可能か？

ウェーバーは、社会（科）学は価値関係を前提するにもかかわらず同時に価値判断を排除せねばならない、と述べている。社会科学が取り組むべきは事実判断（～である）であって、価値判断（～べきだ）ではない。こうしたウェーバーの考えを端的に表すのが、「価値自由 (Wertfreiheit)」という言葉である⁵。

野口雅弘によれば、ウェーバーの「価値自由」とは、「ある『観点』の選択については恣意性を排除できないが、その選択のあとの思考プロセスには価値の混入がないようにする、という意味」(野口 2020: 68) である。「観点」の選択は研究者が立脚する価値に結びつけて行われるが、それはあくまでも何が「知るに値する」かを定める手続きであって、そうした観点が設定された後は通常の学問的手続きに即して研究を行わねばならない⁶。

これについてシュッツは、先述の「主題的レリヴァンス」とセットの概念である「解釈的レリヴァンス」「動機的レリヴァンス」の2つを用いつつ論じている。シュッツは次のように述べる。

[解釈的レリヴァンスについて:] 問題（主題）がいったん定式化されれば——そしてそれはあらゆる方法論的考慮から独立しているのですが——、理想的な方法は、つまり十分に発達したという意味で純粋な方法は、取られねばならない解釈の段階を私たちに教えることができ、また解釈のために収集されねばならない資料について私たちに教えることができます。(Schütz und Voegelin 2004: 385-6=2011: 137)

⁴ ただし、興味深いことに、ウェーバーは社会科学の前提をなす価値に「真理の価値」を含めている。「真理の価値を認めない人にたいしては——じっさい、科学的真理の価値への信仰は、特定の文化の所産であって、自然に与えられるものではない——、われわれは、われわれの科学の手段をもってしては、なにものをも提供することができない」(Weber 1904=1998: 158)。「真理の価値を認めない人」というのは、今日の文脈では陰謀論者や歴史修正主義者を指すだろう。

⁵ しばしば日本のウェーバー研究において Wertfreiheit は「価値からの自由」と「価値への自由」の両方を含意すると主張されるが、坂敏宏 (2014) および今野元 (2021) によれば、「価値への自由」は英語圏およびドイツ語圏の研究では見られない解釈であり、かつウェーバーのテキストに即してその解釈の典拠を見いだすことも難しい。なお、シュッツが価値自由という言葉を使うときも、やはり「価値への自由」という含意は存在しない。

⁶ 坂にしたがえば、この論理はリッカートの価値関係論には含まれていない。「Rickert において価値自由とは、Münsterberg と同様に『普遍的価値と関係なく』、『価値判断だけでなく価値関係づけも回避する』、まったく価値にかかわらない自然科学にかんする概念だった (…)。したがって Rickert は、価値を帯びた社会的出来事の『客体化』を、価値から離れること (価値自由) ではなく逆にその価値を関係させること (価値関係づけ) によって達成しようとした」(坂 2014: 280)。

[動機的レリヴァンスについて:] 私はレリヴァンスの第三の概念を動機的レリヴァンスと呼びました。その理由は、それが問題を問う人の動機を構成するからです。つまり、いかなる水準で、そしてどの意味連関において研究がなされ、どのくらいの深さまでこの研究は追求されるべきなのか、ということです。(…) フッサールの言い方を用いれば、こうも言えるでしょう。ある主題は内的地平と外的地平に関してどの程度解明すべきか、を決めるのが動機的レリヴァンス構造であると。(Schütz und Voegelin 2004: 386=2011: 137)

シュッツの考えでは、解釈的レリヴァンスと動機的レリヴァンスは価値自由の領域の内側に存在している。

マックス・ウェーバーの意味での価値自由とは厳密には何を意味しているのでしょうか？ これが主題的レリヴァンスを指し示すことはできません。私の見るところ、価値自由はまず第一に私が解釈的レリヴァンスと呼ぶところのものを指しています。さらに、価値自由は動機的レリヴァンスがあなたが時代精神と呼ぶところのものから独立であるべきだという事実を指しています。(Schütz und Voegelin 2004: 387=2011: 138)

ウェーバーと同じく、シュッツも価値自由の領域は可能であると考えている。主題的レリヴァンスを設定した後は、社会(科)学は学問共同体の内部の手続きに従わねばならない。原則として当該の学問共同体において認められた手続き・方法だけが利用可能であり、そうでない手続き・方法を用いる場合はその正当性を示さねばならない。そして、主題の追究は当該分野の学問的な知識集積(=先行研究、「科学的状況」(Schütz [1953] 1962a=1983))との関連で行われねばならない。シュッツにとってウェーバーは、「社会科学の価値自由性を主張した最初の1人であり、社会科学の研究者の思考結果に意識的・無意識的にきわめて容易に影響を及ぼす例の政治的イデオロギーや価値イデオロギーに対して闘いを挑んだ」(Schütz 1932=2006: 27) 人物なのである。

ウェーバー	シュッツ
価値への関係づけ	主題的レリヴァンス
価値(からの)自由	解釈的レリヴァンス
	動機的レリヴァンス

4 「神々の争い」は避けられないのか？

ここまでの議論で、ウェーバーの「価値関係」と「価値自由」をシュッツが「主題的レリヴァンス」「解釈的レリヴァンス」「動機的レリヴァンス」の概念によって整理している

ことを確認した。最後に、「神々の争い」の問題についてシュッツの視点から何が言えるかを考える。この問題についてシュッツ自身は何も述べていないので、以下では彼の立場を敷衍しつつ考えたい。

『職業としての学問』の中でウェーバーは、「無前提の学問」という観念を批判しつつ、「客観性」論文で論じた「知るに値する」ものの選定という議論を再度扱っている。この文脈においてウェーバーは、学問の前提をなす価値が学問の手続きによって証明できるたぐいのものではないことを強調している。ウェーバーにとって、「もろもろの価値秩序の神々の争い」(Weber 1922=1980: 54)は避けることも調停することも不可能なのである。往復書簡におけるシュッツの相手、政治哲学者エリック・フェーゲリンの言葉を借りれば、「進歩主義者の価値に関係があるゆえに意義がある (relevant) とされる事実は、保守主義者によって意義があると考えられている事実と同じではないであろう。自由経済論者に意義がある事実は、マルクス主義者に意義がある事実ではないであろう」(Voegelin [1952] 1987: 13=2003: 26) という状態が「神々の争い」である。このような社会(科)学の見方は、価値自由の領域の成立可能性を掘り崩しかねない含意を持っている。なぜならこの見方は、社会(科)学という営みの初めから終わりまですべてがイデオロギーによって色づけられており、異なるイデオロギーを持つ研究者同士の対話は不可能だ、と言っているに等しいからである。

しかしこの見方は、あるひとつの(非認識的)価値を独断的に信奉し他の価値を完全に拒絶するような人間を描いているという点で、社会(科)学の描き方としては一面的である。そこで描かれるのは、いかなる「事実」を提示されたとしてもみずからの考えを変更しないような人間——カール・ポパーが「独断的思考」と呼んだものに囚われている人間 (Popper 1976=1978: 46)——に他ならない。しかし、それはかなり極端な場合であろう。「独断的思考」に囚われていない人間を想定するならば、事態は異なりうる。

「神々の争い」を回避する第1の道は、研究を間主観的な相互批判と相互点検の過程として捉えることである。シュッツは、「科学者 A の観察による発見およびその人によって引き出された結論を、科学者 B が点検 (control) し検証する過程」(Schutz [1954] 1962b: 53=1983: 116) を科学的活動の本質的な契機であると考えている。同じことは、「科学の客観性とは、種々の科学者の個人的な事柄なのではなく、科学者がお互いに批判しあうという社会的な事柄、科学者の友好的-敵対的な分業、彼らの共同作業、また彼らの相互対立的作業という社会的な事柄なのである」(Popper 1969=1979: 118) というポパーの言葉にも表現されている。たとえ研究者ごとに「意義のある (relevant) 事実」が違っても、そうした「事実」の主張やそこから引き出される結論は、つねに相互批判と相互点検に開かれている。

第2の道は、常識的知識の可変性である。社会学者が主題設定の前提とする(非認識的)価値は常識的知識に基づくが、常識的知識は学問による知識産出を通じて変化する可能性がある。常識的知識が変化すれば、研究の主題的レリヴァンスも変化する。少なくとも、他者の研究の主題的レリヴァンスを共有することが可能になる。他者の思考に耳を傾け、

他者の生み出した知識を受け入れる用意があるかぎり、私は自分の常識的知識のストックを更新する可能性に開かれている⁷。

5 結論と課題

本報告では、①社会学が「価値」と結びついていると述べる時、その「価値」とは正確にはどのような種類の「価値」なのか、②社会学が「価値」と結びついているならば、「価値から自由な」領域はいかにして可能なのか、③社会学の立脚する「価値」が多元的であるならば、ウェーバーのいう「もろもろの価値秩序の神々の争い」は避けられないのか、という3つの問いに即して、主にシュッツの議論を紹介してきた。①社会学と結びつく「価値」は研究者にとって「知るに値するもの」を選定する価値であり、これは非認識的価値をも含む。この価値に基づいて設定されるのが研究の「主題的レリヴァンス」である。②いったん「知るに値するもの」が規定されたならば、その後は学問共同体の内部で認められた方法・手続きに依拠して研究が行われることで「価値自由」の領域が担保される。③「神々の争い」が描く社会学者は独断的思考に囚われた場合の社会学者であり、他者の思考に耳を傾ける姿勢を持ち続ける限りで「神々の争い」は回避可能である。

本報告では、社会学の「価値」との関係について、ウェーバーとシュッツの議論に絞って検討した。他の理論家による議論、とりわけ近年の「社会科学の哲学」における議論の検討については、今後の課題としたい。

付記

本報告は JSPS 特別研究員奨励費 20J00674 の成果の一部である。

文献

今野元, 2021, 「Wertfrei は『価値自由』か——ヴェーバー研究におけるドイツ語解釈を巡って」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』22: 127-48.

野口雅弘, 2020, 『マックス・ウェーバー——近代と格闘した思想家』中央公論新社.

Popper, Karl R., 1969, “Die Logik der Sozialwissenschaften,” Theodor W. Adorno et al., *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie*, Neuwied und Berlin: Luchterhand, 103-23. (浜井修訳, 1979, 「社会科学の論理」城塚登・浜井修・遠藤克彦訳『社会科学の論理——ドイツ社会学における実証主義論争』河出書房新社, 109-28.)

———, 1976, *Unended Quest: An Intellectual Autobiography*, Fontana/Collins. (森博訳, 1976,

⁷ 言い換えれば、第1の道も第2の道ともに「対話」の重要性を示唆している。対話の成立には、相手の言葉を聞いて自分の考えを修正・更新する可能性が必要となる。第1の道は主に研究者同士の対話であるのに対し、第2の道は研究者以外の人間も含めた広い意味での「対話」の過程である（常識的知識に変化が生じるとしても、それは研究者から研究者への直接的な知識伝達によって生じるわけではないかもしれない）。いずれにせよ、社会（科）学が対話的な営みであり続ける限りで、「神々の争い」は回避可能である。

- 『果てしなき探求——知的自伝』岩波書店.)
- 坂敏宏, 2014, 「Max Weber の ‘価値自由’ の科学論的意義——テキストの再検討」『社会学評論』65(2): 270-86.
- Schütz, Alfred, 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Wien: Verlag von Julius Springer. (佐藤嘉一訳, 2006, 『社会的世界の意味構成——理解社会学入門 (改訳版)』木鐸社.)
- , [1953] 1962a, “Common-Sense and Scientific Interpretation of Human Action,” *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, The Hague: Martinus Nijhoff, 3-47. (渡部光・那須壽・西原和久訳, 1983, 「人間行為の常識的解釈と科学的解釈」『アルフレッド・シュッツ著作集第1巻 社会的現実の問題 [I]』マルジュ社, 49-108.)
- , [1954] 1962b, “Concept and Theory Formation in the Social Sciences,” *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, The Hague: Martinus Nijhoff, 48-66. (1983, 「社会科学における概念構成と理論構成」『アルフレッド・シュッツ著作集第1巻 社会的現実の問題 [I]』マルジュ社, 109-33.)
- Schütz, Alfred und Eric Voegelin, 2004, *Eine Freundschaft, die ein Leben ausgehalten hat: Briefwechsel 1938-1959*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft. (W. Petropulos, trans., 2011, *A Friendship That Lasted a Life Time: The Correspondence Between Alfred Schütz and Eric Voegelin*, Columbia: University of Missouri Press.)
- Strubar, Ilja, [1994] 2007, “Wertbeziehung und Relevanz: Zu Alfred Schütz’ Weber-Rezeption,” *Phänomenologie und soziologische Theorie: Aufsätze zur pragmatischen Lebenswelttheorie*, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 151-71.
- Turner, Jonathan H., 2019, “The More American Sociology Seeks to Become a Politically-Relevant Discipline, the More Irrelevant it Becomes to Solving Societal Problems,” *The American Sociologist*, 50(4): 456-87.
- Voegelin, Eric, [1952] 1987, *The New Science of Politics: An Introduction*, Chicago: The University of Chicago Press. (山口晃訳, 2003, 『政治の新科学——地中海的伝統からの光』而立書房.)
- Weber, Max, 1904, “Die ‚Objektivität‘ sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis,” *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* Bd.19, 22-87. (富永祐治・立野保男訳, 折原浩補訳, 1998, 『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店.)
- , 1922, “Wissenschaft als Beruf,” *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 524-555. (尾高邦雄訳, 1980, 『職業としての学問』岩波書店.)